

江戸博物誌を顧みる

磯野直秀

江戸時代の日本では動植物を扱った書物・図譜の類がおびただしく生まれ、周辺領域まで含めれば、現存するだけで数万点に達するに違いない。その中身はさまざまで、本草（昔の薬学）的立場の強いもの、園芸・養禽・貝の収集など趣味的なもの、農業や物産振興につながる実利的なもの、史書や古典に現われる草木や鳥獣の考定、文学色の強いもの、動植物それ自体への知的関心に基づくもの等々だが、それぞれが独立した形ではなく、互いに何がしか結びついていることが多かった。また、その担い手は、大名や公家、医師、武家、商人、花戸（植木屋）、文人、僧侶、神官、絵師、農民……と、じつに幅広い人々であった。

我国の文化の大半は中国に由来し、やがてそれが日本的なものへと変容していくことが多いが、博物誌も例外ではなかった。もっとも、5～6世紀に漢土から医学の一部として本草書が伝来して以後一千年ほどは本草の域を出ず、それも漢書の祖述に留まっていた。だが、16世紀の中頃から徐々に独り立ちしはじめ、泰平な江戸時代に入ると、基盤を漢土に置きながらも、多岐にわたる独自の発展を遂げ、本家を凌駕するにいたったのである。

時を同じくしてヨーロッパでも博物学が盛んになり、多数の書籍・図譜が出版された。その東西の動植物書、とくに図譜類は一見よく似ている。しかし、内容に一步踏み込んでみると、中国・日本の博物誌と西洋の博物学は大きく違っている。

西の博物学では古くアリストテレスの時代から解剖が普遍的な手段であるとともに、実験も重要な手法となっていた。一方、東の博物誌は、解剖とも実験ともまったく無縁であった。西の分類は、内部構造などに基いて「系統」的体系を作り上げる方向に進んでいたが、東のそれは、「鯨を魚に入れ、コウモ

りを鳥に含める」という外部形態や生態による「仕分け」であって、系統関係を重んじなかった。

明治以降の人々はこのような違いを見て、「東西ともに長い間さして優劣なく歩んできたのだが、17世紀の科学革命を境に、西の博物学は非科学的段階を脱して科学へと進んだのに対し、東の博物誌は昔のままの非科学的段階に留まっていた」と評した。つまり、「同じ線路の上を走ってきたのだが、西の列車がスピードを上げはじめたのに、東ははるかに遅れて相変わらずノロノロと動いていた」、ただ「日本は江戸時代に一定の蓄積を持っていたので、開国から比較的短時間でスピードを上げ、西の列車に何とか追いつけたのだ」と。

博物誌を調べはじめた頃、私も先人たちと同じような見方をしていた。しかし、江戸博物誌の世界をうろつくうちに、東西の違いはもっと本質的なものではないかと思いはじめた。一言で言うと、西の世界がギリシアの昔からモノの「仕組み」と「体系」を追い続けてきたのに対し、東は「仕組み」や「体系」にまったく関心を示さなかった世界だと気付いたのである。

西では、すでにアリストテレスが動物の運動や発生などの仕組みについて、観念的ではあるが、それなりの説明を試みている。また、彼は多くの動物を解剖して、外部形態・内部構造・発生様式などに基く系統的分類「体系」を考えており、その流れが現在の動物分類学にまで及んでいる。自然界は無生物から人間まで連続的に移り変っていくという「自然の階段」の体系も、その頃に提出されている。

また、近代になっての話だが、「種子はどのような仕組みで生じるのか」と、花の中央にある細いシベと太いシベの両方または片方、あるいはそれぞれの一部分を切り取るなどの実験を重ねて、シベにはオシベとメシベがあり、それが植物の生殖器官であることを発見する。こうして仕組みを知れば、積極的な交配による品種改良が可能になる。

このような仕組みや体系の追求は、東の博物誌にはまったく見出せない。

生物の世界以外に目を転じて、事情は変わらない。いや、より明確になる——西の世界は物体落下についてギリシア時代以来問い続け、それがやがてガリレオやニュートンによる科学革命につながっていくが、東ではモノが落ちる仕組みについて考えようとした人物は、どうやら皆無らしい。東西とも古代から天文学が発達していたが、西では地球中心の同心円状宇宙体系が提出されたのに対し、東ではその種の体系を考えようとした形跡がない。数学においても、西側はユークリッド幾何学という整然とした体系を古く作り上げたのに、

小数・負数の考案や方程式の解法で西を数百年から一千年以上先んじた中国では、円や直線の定義も無し、証明も一切無しに計算を駆使していた（江戸時代の和算も同じであった）。体系化に関するもっとも象徴的な事実は、西の世界では全ての学問の基礎となった論理学が、中国ではついに誕生しなかったことだろう。

解剖や実験は、モノの「仕組み」や「体系」の追求手段である。その追求をしなかった東の博物誌が解剖や実験と無縁だったのは当然だったといえる。

分類についても、東のそれは体系化と関係なく、使いやすく仕分けるためのものだった。

そもそも分類には、系統分類（体系的分類）と並んで、物事を整理するための「仕分け」分類（探索用分類）がある。自宅の本棚で目的の本を探しやすいように分けて並べるのがそれで、書名あるいは著者名の五十音順にするやり方もあれば、内容別やサイズ別もあるし、それを組み合わせることもある。要するに、自分で探しやすければ良い。当然ながら、人によってやり方は異なる。東の分類はまさにそれであった。

動物の場合、江戸時代の日本でよく使われたのは次の5類に大別するやり方だった（といっても当時の人々は定義をしないので、諸本をもとに私が整理したもの）。

獣類＝四つ足で、毛をもち、胎生である

禽類＝昆虫以外で翼をもつ：鳥のほかに、コウモリ・ムササビを含めることもある

魚類＝水中を泳ぐ：クジラ・イカ・（エビ）・クラゲなどを含む

介類＝水中で生活し、殻をもつ：貝類のほか、カメ・カニ・（エビ）
・ウニ・石サンゴなど

虫類＝上の4者以外：昆虫・クモ・ムカデ・ヒル・ミミズ・カタツムリ・ヒトデ・トカゲ・ヘビ・カエルなど

（必要に応じて、山禽・林禽・水禽……などの下位分類も使った）

虫類が雑多すぎることを除けば、いたって常識的で、学者でない人々にもわかりやすかったと思う。江戸時代には鯨が各地で捕獲・解体されていたから、魚とは違って獣の仲間らしいことに気付いていたが、それでも上記の分け方を変えなかった。西の分類とは、視点を異にしていたのである（注1）。

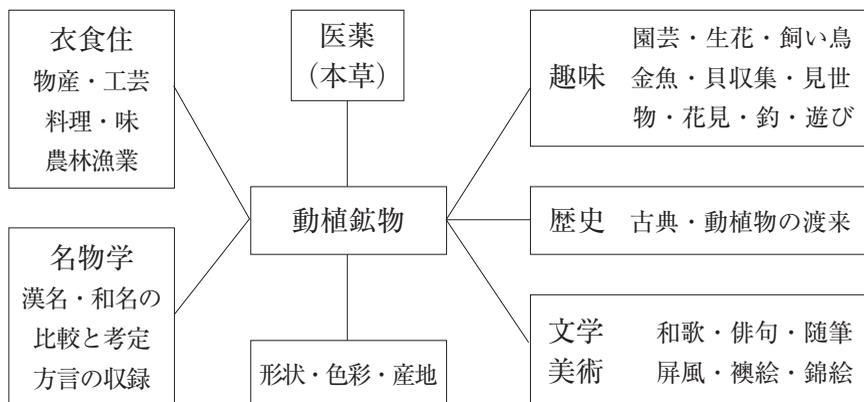


図1 日本の博物誌が触れている事項

名物学——ある「名」の生きものが、どの「物」に当たるかを考定する、あるいはその逆に、ある生物がどの「名」で呼ばれているものかを考定すること。間違った品を薬品や食物に用いれば、命にもかかわるからであった。具体的には、漢書に登場するある漢名の動植物が、和名で何と呼ばれている品に当たるかの比定が必要になるが、日本は広いのでそれぞれの土地での方言を収集することも欠かせなかった。

結局、東と西はおなじ線路の上を走っていたのではなく、別々の線路を異なる方向に向かって走っていたようだ（注2）。そして、東のそれは、いくら時をかけても「科学」という駅には到着しない路線であった。

では、東の路線は無価値で、百年前の人々がしたように捨て去るしかないものだったのだろうか。

私はそう思わない。江戸博物誌には、もう一つの特徴が存在したからである。それは、いつも「人の目」を通して動植物を見ているという点だ。

上の図は、江戸時代の動植物誌がどのようなことを記述しているかを、私なりにまとめたものである。たとえば、鳥の本でツグミなりウグイスなりの項を見ると、漢名の見出しの後に標準的な和名が記され、続いて各地での呼び名（方言）が列挙される。ついで形状・色彩などの特徴、習性、生息地や去来の

時期が記され、さらに薬としての効能・用法から、味の善し悪し、ときには料理法にも触れる。話題が猟法・飼育法・治療法に及ぶこともある。また、『日本書紀』や『枕草子』の文、『万葉集』や『夫木和歌集』の和歌などを引用し、注釈を加える。民話や伝説・俗習、ウグイスならばその名所も挙げるし、外来種であれば原産地や、日本に持ち渡られた来歴も述べる。記述が鳥そのものだけでなく、生活と文化、歴史の広い範囲に及んでいたのである。

もちろん著者によって力点の置き方は千差万別だし、図と品名だけの場合も多く、また薬学色の濃いものでは専門的記述に終始する傾向があるが、全般的には現在の図鑑類の記述が主として内外の形態や生態に限られるのとは、大きく違っていた。

しかも、身近な話が多いから誰でも興味を抱き、形態や生態の記述を含めて大半は難しい内容ではないので、理解しやすかった。「広く、浅く、近付きやすい」、これが江戸博物誌の特色だった。この点を、私は高く評価したい。冒頭に記したように、幅広い人々が江戸博物誌を担えたのも、この「近付きやすさ」故のことであった。

西の動植物誌も、古代・中世には人に関する話題に富んでいた。だが、科学革命以降、西の世界では人につながる話題を雑音として切り捨て、動植物そのものに対する知的関心——形状・生態などの記述、諸々の現象の仕組みの解明、ならびに生物界の体系化に集中してきた。別の表現をとれば、生物そのものの枠のなかだけで、生きものを扱ってきた。江戸博物誌と対比する形で言えば、いわば「生物の目」だけで生きものを見てきたといえよう。

そして、仕組みや系統的分類の追求には、顕微鏡や実験器具の操作とか、外部形態や内部構造についての細かい知識が必要だから、一定の訓練を受けた専門家でなければ近付きにくいものになっていく。こうして、欧米の博物学は時とともに、ますます「狭く、深く」なりつつ、動物学・植物学の段階を経て、現在の生物学につながる。

最近の生物学の進展は目覚ましい。遺伝子の働く仕組みの詳細が明らかにされ、免疫や形態形成の謎も解けはじめ、過去の進化の道筋もDNAの比較で光が当てられつつある。しかし一方では気になることもある。話が微に入り細に入るにつれて、個々の生きものや自然全体の姿が見えにくくなり、また門外漢には内容の理解がきわめて困難になっているからである。先端的生物学は一般の人々から遊離してしまい、人々と自然を結ぶ手段ではなくなってしまったと感ずる。

数年前まで私は大学で文科系の学生に生きもののお話をしていたが、その頃、「小学校までは動物や植物が好きだったのに、中学・高校で“生物学”を教わっているうちに無味乾燥で興味を失ってしまった」学生が少なくないのに気付いた。あまりにも細かい話ばかりで、人間に触れることがほとんど無い授業では、そうなるのも無理はない。しかし、自然と人間の間隔を問い直さなければならぬ時代に、これは不幸なことと思う。

自然への切り口には、いろいろあっても良いのではないか。「深く、狭く」進む現代自然科学の手法もその一つであり、それでしか解けない謎が多いのも確かである。しかし、全ての人が「DNAやタンパク質の構造・機能を知らなければ、生物が理解出来ない」わけではない。生きものや自然とは、また違った接し方や探り方をしてもよい。「浅く、広く」、いつも「人の目」を通して動植物を眺める江戸博物誌の在り方は、その一つの答だと思う。

江戸博物誌の流儀では、欧米科学とは逆に、動植物を人間がらみで取り上げていく。それにならって、日常の食べ物はもとより、町なかにもやってくる小鳥、街路樹の木々、ベランダの鉢植え、ゴミ捨て場を狙うカラス……と、生活に密着する諸々のことから話に入れる。

かつての博物誌の記録そのものも、話題を提供できる——代々の和歌集への草木の登場回数（たとえば『万葉集』では、梅が一位で、菊や牡丹は一首も無い）や、和名・方言の変遷、サツマイモや孟宗竹の渡来と普及の歴史、鯨の独特の捕獲法や利用……。鳥や獣の増減——家光の時代には江戸に白鳥が群飛してきたが、吉宗の頃には珍しい獲物となってしまった、一時期トキは方々に移植されたが、地方によっては増え過ぎて厄介者扱いされるに至った等々（注3）。独自の発展をとげ、開国後に欧米人を驚嘆させた江戸時代の園芸も話の種になる（注4）。

このようにして、人とのつながりを軸に個々の生きものについて語っていけば、動物も植物も親しみやすいし、やがて自然全体にも関心が広がっていくのではなかろうか。しばしば耳にする総合教育に、そういう形が役立てられないか。

学問を含むすべての人間行為が単一の路線を進むという歴史観は、はたして正しいのだろうか。生きもののお話にはいろいろな道があっても良いのではないか。そして、あれか・これかではなく、互いの優れた点を活かすことが、いま求められているのではないか。江戸時代の博物誌の特色やデータはその一助

になるにちがいない——いま、私はそう思っている。

(注1) 植物の場合は、たとえば草・木・穀(豆も含む)・菜・果に5大別し、各類を「山草・芳草・湿草・蔓草・水草・毒草……」のように、形状や生育地・性質などで下位分類する。

なお、西の世界にも「仕分け」分類はある。有名なリンネ式分類はその典型で、彼はオシベ・メシベの数をもとに植物を区分して、目的の種を探しやすくしたのである。しかし、この分類は系統関係に基かないので、リンネ自身も仮のものと考えており、系統に裏付けられた「真の」分類を追求したが、完成には至らずに終わり、その目標は次の世代に委ねられた。

(注2) 最近の私は、東での動植物の記述に対して、「博物学」の語を使わずに、「博物誌」と記している。西の「博物学」とこれだけ違ったものと同じ語句を当てれば誤解を招くし、「学」というと整然とした体系をもつとのイメージを与えるが、江戸時代のそれはもっと雑然としたもの(悪い意味ではない)だったと思うからである。

(注3) 江戸時代の博物誌は、往時の動植物の豊かさを物語る。とともに、北方系の動物がかなり南下していたと思わせる事例などもある。それは単に話の種を提供するものであるだけでなく、過去の環境を示す貴重なデータでもある。

(注4) 斑入^{ふいり}の草木をはじめ、背丈の低い針葉樹(ヒバなど)、椿・桜・楓・ツツジ・菊・花菖蒲……の多彩な品種、とてもアサガオとは思えない姿をした変化朝顔、キャベツの仲間から生まれたハボタン(葉牡丹)、古典園芸植物といわれるフクジュソウ・マツバラン・イワヒバ等々は、江戸時代園芸の残した文化遺産といえる。

(いその なおひで 慶応義塾大学名誉教授)